

剪花翁傳

秋

九八七月月

省 書 號 冊

和 農 書 圖 第 八 冊 共 七

庫 文 官 政 大

	一	和
	二	書
	六	門
四	二	
冊	架	函

庫 文 閣 內

一	二	和
九	一	書
四	六	
冊	二	類
架	號	

內 閣 文 庫

番 號	和 11162
冊 數	4 ( 3 )
函 號	199 378



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



Kodak, 2007 TM Kodak





高野山  
文庫

消印

見ふまけ 前篇卷之四

七月開花之部

○木芙蓉

花重又八重なり 色淡紅赤縁の紅の隈より形は牡丹の

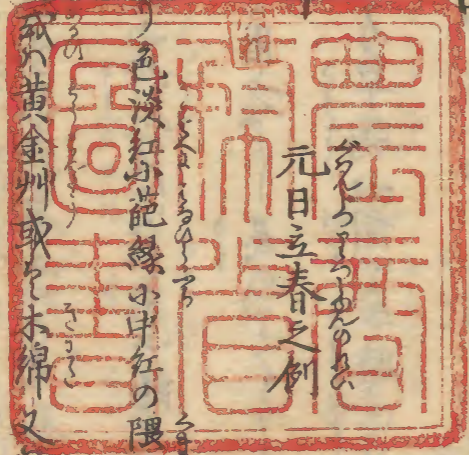
葩より軟く薄く五瓣なり 秋の黄金州或は木綿又ハ木槿系に似く猶大

き 開花は秋の頃より九月迄咲き秋牡丹といへり花莖葉は出く厚く

三輪の月々咲き 方日向地三分湿土肥摺ると下種春ひら

分株 春挿しより出芽其年十月小分挿す 木葉も腐り皮も

カ強 水々至り上りて 早朝の露午の刻已後より徒ら



明治十二年

前篇卷之四







開花七月下旬育方隨愈之後英より内小止き種つてハヤ充り  
此種天保癸卯の年頃舶來は今諸方小弘り 升六切改て焼べー

○鳳凰槍扇艸 花並種の 開花七月中旬より八月下旬迄り

育方並種の 葉の形ら孔雀槍扇より亦目狭小鱗密之

○銀杏鶏頭花 花赤又黄又赤黄雜あり又同種の葉の寸短きり

長五寸より一尺餘をり全鮮と縮り美あり是を矮鶏と又朝鮮

ともの開花七月中旬より八月中頃を盛之育方九鶏頭花小同一

○秋藤瞿麥 花白り又淡赤小淡鼠色の氣らり此花開花七月  
中旬より漸と赤く鼠色の氣尚らり 方三分蔭地二分濕 土砂交

肥油類又淡小便下種春彼岸此年僅小五六寸より小より翌年五月

末より莖枝曲り形ら春の藤瞿麥小似れど尚大形之莖も太く葉も殊小

厚く秋小至て咲く英三平攢て一房をり此時剪花を切り二番芽出て

九月小花りされど莖枝短く英也少りして勢ハ劣り一番種

とり熟く英のまを収め翌春蔭ハ花枝も勢ハ又盆中に取蔕

とり十月温寒小入翌春暖氣得く承出し漸と成長して七月よ至

花咲き莖單と枝あり勢ハ劣りとり一番二番共小霜覆ひて置ハ大

寒頃迄花保つかり此種豆別の山中に産すは天保壬寅春是を得り

○和紫苑 花一重色紅藤開花七月中旬之花枝もに赤日りハ





唐綿

木芙蓉



播州猫柳



中品と云育方育方の育方もみかふ

○天神花 花千重 色黄赤 開花七月中旬より八月盛之 方日向

地一分湿土地一分湿土より 肥淡小便芽出後肥淡小便芽出後二三度と云

下種春彼岸

○木槿 花八重色藍曼花八重色藍曼と淡藍淡藍小鼠色小鼠色かろくかろくなり 開花七

月中旬より 升水升水の方升水の方既小既小より

○百日紅 花紅色花紅色小英群小英群て房房より 開花育月中旬より八月中迄なり

元是山生の樹故小育方元是山生の樹故小育方の隨意隨意あり 幹枝幹枝の枯溜枯溜小小皮理濃皮理濃く堅

○梅梅 實赤實赤りり白りり白りり 熟熟する時節時節は七月中旬より 挿花挿花小

用方 方日向 地乾 土土より 肥大肥大便寒便寒中小中小 接春彼岸接春彼岸寄

接あり 移同節移同節之 是亦山生是亦山生の物故小水物故小水氣氣い

○七月梅 花二重色白 開花七月中旬より咲之葉咲之葉ハ夏土用中より

開て散て開開て散て開花花の節節も少く残り段々段々小落小落之素素より木の性瘦

る方ありとの故小花も間粗間粗小付之 育方清梅育方清梅も小同

○女郎花 花黄同種花黄同種なり 開花七月中旬より小なるの一種

かり 升水升水を切切て焼焼べ

○鹿の子 百合 花淡赤花淡赤濃赤濃赤の點班點班あり 開花七月下旬花中形之

○葉鶏頭 雁來紅雁來紅 めき竹 黄色葉あり 猩々葉猩々葉りり十分の色ハ



七月下旬より用ひ方日向地中乾土莖交肥淡小便下種春彼岸は  
 剪時を夕方露候にけり切即時行て副根元より葉を  
 去なりしうらぶがを結し是の莖を動揺せぬるの料あり  
 升水みづあがの土酢つちすをよよく煮るべし如酢下品水が利りんと木  
 灰あしけりて煮るべしよれ月より氷器ひやうが小ゆくりこ入水より  
 後切は又剪へしきざり切らざりしゆり或は切台を割  
 てもよし世間冷氣せかんれいきふふきぎ水をゆがゆり  
 又方藁わら灰ひをよよく煮るべし又方硫黄りゅうわうをよよく煮るべし  
 又方和木わぎ中唐鹿尾藻ちゅうたうろくびそうを能煮るべし冷水れいすい小深こふか井い入いるべし

○播州猫柳

紫苔既成を七月下旬之莖平小薄く海布り莖を

如一倍小是といひざりしゆり葉の相至り結まり故小花繁  
 常の猫柳ねこりゅうの繁密はんみつありと方日向地一分湿之是を平莖ひらぎ多く蔓

土肥つちこを種こをよよく播まき春彼岸より

○水引草

兼塵花赤白二種開花七月下旬之方半陰地半湿

土莖つちこ又ホコ土つち小砂こすな交肥淡小便分株下種ぶんくわげもれ春彼岸より  
 分株ぶんくわの成長せいじやうを中下種ちゆうげをせり白色はくしきありまき清雅せいあなり莖も青  
 緑きよして賞しょうはじ赤色二種あり莖赤しやくき花色はないろ殊こと赤しやくく英目えいめ狭小せうせう付て  
 勢いきりひり返かへる莖この黒くろくて鈍どんりもの英えいの裏うら向むかく敷ふ少せうして劣せうなり



八月開花之部

○薄 芽の春彼岸後より生と穂八月上旬出るとり穂葉共小

用之 郊野小生じり物ありよを育方のいん

○糸薄 葉至り細く縦斑あり穂八月上旬なり穂葉も用ふ

性質薄く同 一方小升水の朝夕を同小剪取 和本州 唐鹿尾藻

右二味と切らしてよく焼冷水小じりと并置其後用之 又右二味

よく煮てもよくいづれも冷水小并やぶ

○萩 糸いた花赤色形之く枝垂る 〇白くたあり 〇宮城野

花の色赤く形之く 〇矢筈又めくもい又雀もいりわ色直

高と四尺計も及り 開花八月上旬方地土橋より肥大便寒

中ふく 移分株冬より春彼岸迄 升水と戻けして

煮るへ 又上酢して煮る愈り 又方本只と佛湯小并此湯

と沸湯と仕習行入如是二三枚も佛湯小登て後冷水小く

と漬より水上る時用之 又方薄き志を覆ひ此より沸

湯と焼きとりまきよく冷水漬かて後并

○茶の花 花の色白く形山茶花の至り之きもの小似り開花

八月上旬之方向日二分湿土えん 肥方便寒中に入

前花翁傳前篇卷之四 八月 七



下種ハ秋彼岸小ぬぎく春彼岸取出して畝小植へ一圃一芽生

易一移秋彼岸後より九月より長たふあまると活生う

挿花うててもふりて開雅なり

○八朔梅 花ハ重色紅 開花八月上旬之是の如くし中咲くもの

五秋の頃小葉と残りハ撮て勢氣とふりまじり故くささち嫩も亦

花と共不出之自然不落葉とらるもの十月乃亦より花開く

咲く末二月の頃満開とらるなり

○早水仙 開花八月上旬之元是早咲ふりハ早作こささ

時ふりり賞翫とらるは美姿を貪る今是と聊辨して是早

業あまり代知しは美姿貪心と破りしむりて大底四月中旬頃水

仙葉長て形り崩れ倒れと姿失ふと剪花者通して是と葉小

ふりり此時根と堀出して根玉の長き或ハ小玉あまらる

去り大玉ハ真圓とらるは取三日計よく干し乾し小便中り

浸し直らよ取上終日干乾くと是れはとらる更五音とらる月と

重干て陽地と深と五六寸燗燗けく床とふり那智黒石或ハ淡

州黒の小石ふりても一連小並布其上にボ玉三寸計置ありし

件の大丸玉と植並一ヶ月とかりて経て葎篋をて日覆とらると高と

三尺計昼夜共小置を隔日に一度の真冷水と洗くべり若連日洗



氷せんといふが吐水道よりとくし水溜滞まり悪し是の如く  
 冷水で焼くこと幾日といふことハ定めず其芽繕ひて考へて洗く  
 こととてよん時と考へて葎篋を取拂ふことあまはし是も時氣よ  
 より取拂ひ其ま置てもりり言語をめて解らうし  
 覆て取拂ひて炎天小當まり頃々芽成長し花と結ぶ初小  
 根玉と干時と六月の中筋に擬し小便小浸し五月干付て極暑  
 梅日覆して冷水で灌ぐと寒氣小擬と葎篋と拂ひて日  
 常々々々を陽氣地中に徹して花と催とかり

○山茶花 並白 花一重色白 開花八月中旬 方地土肥移接

摺共小椿小同 己下の山茶花育方並同

○紺紫莢 花の色濃青 開花八月中旬より九月迄咲之花枝

ともれさまづバ中品より育方同

○白露椿 大輪花一重色清白 開花八月中旬之此花椿の軒くもの

○初嵐椿 花一重色太白 蕾玉のみ 故小白玉と稱と並葉太く

大之 開花八月中旬之又同種小嵯峨と稱するものなり 唇尖より葉も  
 兼も綠色深し 兩種共小温室に入る時を花葉凋と落さるる

初嵐はつらつと清雅なりものあり

○秋の山椿 花一重 紅白飛絞あり 開花八月中旬



○**大輪** 花千重色三種有り 紅又濃紅小白飛紋班 又太白

小濃紅紋の班有り 開花八月中旬之形 葉をく 芥子椿小近く小  
葩段内小群攢りて葩の間小細あり 葉隔より出ると甚大  
輪あり 赤花の葉小班ありて剪花者略通して大輪と名づく  
呼ぶ 又大と濁り又花の班の入りて大輪と名づくを呼ぶ大輪と省  
略して大と花葉も班の入りて大輪と稱するを班の葉  
の花赤地小白班入りて無班葉花を白地小白飛班と佳  
と名づく殊小艶美し此花甲午以後の新生之とて大輪の字に考  
へ此項池田栽樹家綿半とて者の曰成飛の字のほこれ字を知らざる

○**たけあみ** 椿 八朔椿 花二重 色淡紅地濃紅の大小長短の縦班小點  
班等繁密小之 開花八月中旬中輪大葉之 予が園中此核の葉生世  
物數株あり 扱はけもその名を心ゆく 或人情此班を成見  
是を滝波の葉とて之を此鏡と面白

○**貴船菊** 花淡紅色 開花八月中旬より九月中旬まで咲方三分  
陰地三分湿 土肥土砂交り 肥淡小便冬三枝又芽出 前小四五  
度とて分株春彼岸より 成長とて三尺とてりねあり  
分水かきとて切と爛らして酢とて煮るべし

○**睡蓮** 花二重色白く 葉黄なり 開花八月中旬形 鉄泉花



新花前傳前篇卷之四



初嵐椿

水仙早作の躰

八朔梅



八朔梅

黄金艸

新花前傳前篇卷之四

八朔梅

十



風車ふうぐるまもふれり水中すいぢゆうに生なぎ葉は葉はもに葉は葉は中ちゆうも又また似にたり

○唐棠吾右 花黄色 開花八月中旬方三分陰地二分濕土回莖

肥ひ于に籬し春秋しゆんしゆう兩りゆう枝し芽めと催もよほす時ときふへり移うつ二月にがつ末まへ葉は小せう鼈べつ甲けつ班はん

へりりり 升水しやうすいの葉は月げつ絞しぼり火湯ひぢゆうの氣きと防ぼぎを酢す煮にてとべり

又方また根本ねもとより葉は際せ迄まで堅かた小せう刀たう目めと入いれ水中すいぢゆうへ沈しづめぬ其その後のち挿さじ

又方また和わ木もく艸そう 唐たう鹿りく尾び藻そう者しや二味にみとめて切きり成なりよく煮にて其その後のち

冷水れいすいふ并な置おき水みづと用もちふべり

○黄金艸 俗しやく名な蓬ほう瀨せと云いふ 花はなの色いろ黄きづ茶ちや 蕾つがき蓆せ大山おほやま蓮れんのく

開ひらけぞ木き綿めんの花はな小せう似にたり 開ひら花はな八はち月げつ中ちゆう旬じゆん方かた半はん陰いん地ぢ二に分ぶん濕しつ土つち多おほく

と云いふ 肥ひ淡たん少せう便べん寒かん中ちゆう三さん枝し花はなまへ二に三さん枝しと云いふ 下くだ種しゆ春しゆん彼か

岸きより葉はの形かたちら土つち圭けい艸そうの似にり尚なほ大おほきく至いたる細こ長ながく伸のびる

水みづ升あがぐとん時ときを切きりて少すこく勿な改かへて逆さか水みづ 水みづ器が小せう并な置おき

○冬牡丹 剪花者せんかしや所謂しゆゐん寒かん牡丹ぼたん即是これなり之花はなの色いろ紅べに白しろ二種ふたしゆあり

開ひら花はな早はやら八月はちがつより咲さ初はつて月つき々々咲さ續つきて寒かん中ちゆう迄までも花はなあり方かた日向ひなた

西北しよくぱくの塞ふさがる所ところより且かつ風かぜ透すると云いふ 地ぢ花はな壇だん三さん分ぶん濕しつ 土つち回ま莖かき

肥ひ淡たん大便だいべん寒かん中ちゆうふへり 接つぎ春しゆん彼か岸きより花はなの時とき雨あめ覆おほひとへり

夏なつ月つき炎えん天てんふ葭や篔ゆとて日ひ覆おほひとへり 至いたる秋あきの日ひふ葉はとてみとる

刈かり捨すて直ただらね油あぶら糊ごとへり 移うつる此この葉は刈かりして即すなは時ときふと云いふ



又春彼岸もより春を八十、夜頃開花之さて春牡丹の上花と称  
 ともとのと同く蕾辰の刻より開く開く花形約小平く未り  
 刻頃葩収りて葉と掩ひ色ひ翌日も亦開くと昨日のくは是乃  
 如くあつと翌日少やぐり是で上品とんさて九月の末西風吹き又霜  
 降時小及んで花半開きくまはく満開を竟小萎凋ひ之故小  
 西風初吹頃より花壇の三方と樹の上と藁藁の敷く覆ひ固ひ  
 南方小油障子とへく陽氣と取時と花凋きぐりて寒中にも花盛  
 あり故小寒牡丹と称よれど實を春妹二季咲の秋より開く後  
 まく冬に至るもの之茲小あひく剪花者八九月小咲出ると寒

牡丹の早咲と擬稱して賣花市に鬻ぐやと世俗是は求て専ら  
 珍賞とせど霜月より寒中のみ咲くもの甚しく却て賞  
 たりさて挿花小剪小秋の花莖に伸れ故小古枝と長くかたて切も  
 水とみあげて升ともの之若上る時春牡丹の古枝の升水乃  
 方と同くさて春寒の兩種とも池田と奥谷村より夥く出物  
 悉く接木之故小枯根より出芽の勢ひはくして成長易く  
 圃盛ふあふ随ひ接穂の枝と伸後まじく竟小枯散るもの之  
 浪花上町邊より出寒牡丹の花紅とて株を接木小り依て大  
 株とる即ち是剪花者小所謂正本たるもの之又寒牡丹の白花



正木せいぼに至いたり希まれく谷村やむらより出でて白花はくわの寒牡丹さむたんも正木せいぼに更さらふほほりく  
皆接木みなつぎ之此接木このつぎの穂ほと取親木とりおやも亦接木またつぎ之愚おろそか園中そのち小白寒牡丹せうはくさむたんの正  
木せいぼもその十株じゅうしゆ計あり甚たき育そだちり長なが一尺いちせきをうりかろひ三四株さんしゆしゆをり  
此正木このせいぼと云いひ即すなはち取木とり之此取木このとりの葉はと別べつふりべし

○葦あし 穂八月ほ中旬ちゆうぐん之養育やういくの方かた及および自然しぜんのまき挿花さけ小用せうよう之  
一方あつちう小朝夕せうたつせうの梢せう小切取せうせきと和木艸わもくそう唐鹿尾藻たうろくびそう二味にみと云いひ焼冷水やれんすいやくと入  
おれ後のち打うて又また方かた右みぎ二味にみと云いひ煮にくもようおまも冷水れんすい漬置つけざ之

○川竹せんちく 穂八月ほ中旬ちゆうぐん之穂ほも葉はも葦あしにおももて大きおほく莖かきの圍めぐり二寸計  
かり初はつめ小竹せうちくの笋たけのこ如ごとく芽め三月みづかより生なじ五月ごご末すえ專まり盛さかなり

又また株かき元もとより上うへの方かた六分むくぶん目め小せう至いたりて每節まいせつ小枝せうしと生なじ青あおくくして冬枯ふゆがれ  
口くちより川竹せんちくと呼よぶあへり挿さむちを頗おほく雅趣みやうそのまど水みづよよく  
是これを食く益やくの苦水くすい小枝せうし葉はと種たねく浸ひめて用もちふ

○仙蓼せんりょう 花はな煤竹すすちく蔭色かげいろ開花ひらく八月はつが中旬ちゆうぐんより十月じゅうが月上旬じゆうがけまでなり方  
日向地ひなた二分ふぶん濕しつ土肥つちこえり分ぶん株かき春はる彼岸ひんがより形かたちろそりり

○秋透あきすう 百合はくご花はな並なら百合はくごと同おなじ開花ひらく八月はつが下旬ちゆうぐんより十月じゅうが中ちゆうなり

○苗香なほか 花はな黄色きせう形かたちち至いたりて之これを房ふさ女郎花じやうらうが如ごとく開花ひらく八月はつが下旬ちゆうぐん  
方かた日向地ひなた土つち山やま共とも肥こ便べん下種げしゆ春はる彼岸ひんがより株かき十月じゅうが頃ころなり



分だよりよく育まぬ高さの丈もやうに前得くもろく中凋むあり  
升水の方の藪をて枝葉とまがりよむ切口と少く切捨冷水で送  
水して水器小村に替くして水上とて

○鬱金香

花白形藪荷の花ゆかりの四方小出く段々高く伸

咲あり開花八月下旬より九月中咲方日向地二分湿土回莖  
肥沃大便寒中花前小淡小便と後じ分株春彼岸は移三四

月中之花後より三月迄霜覆ひとて盆小栽の時油糟とて  
九月より三月迄地窖入へて廿倍の所謂鬱金香粉は即此根之

○美人蕉

紅蕉 花黒紅色形ら蘭蕉ふ似たり開花八月下旬

より九月の方地無栽物土回莖肥油糟寒中又花前も入へて九時

見合て分株移春彼岸は花後より三月迄地窖入へて

○両面椿

花八重色濃紅開花八月下旬より蕾半開きして尚開く

四五日小サるるも開く偶早く開くもの十小二月で半開の  
休凋むの八九之挿花して半開のまゝもわり又開くもわり一実

かじ又温室小入ても開くを凋と落し此蕾と初嵐と温室利ふと

○水菖冬

又鬼蓮ともいふ花の色紫小淡紅と帯り開花八月

下旬花萱艸小似て蓮のぞん臺らり臺莖葉も小芒刺あり下種春  
彼岸水底小植て分株古根の同時之新芽の二三寸伸く分て



○秋菊 花色種々形ち大中小品數悉く牧筆云々凡開花

八月末より咲 育方夏菊と同ー分株莖元より早くつた芽で

缺苗代りて冬の内より春おつけて并之正月早々らむらむら

并畢る根と生じて春畝小移さるー菊吸虫を日の出の頃けら

て取捨へしわらば花をともるれ又根虫をも土より穿らて取捨

ぐー夏秋寒の菊もれ 升水を切口と焼てー

九月開花之部

○秋擬寶珠艸 花紫色葉之くそ長ー 開花九月上旬之

方三分陰 地土撥り肥淡小便芽出ー前三度花前小四五枝茂くべー

○妙蓮寺椿 花重色淡紅開花九月上旬英之は是亦一奇種之

○白青蘭 花二重開花九月上旬より十月迄あり 方半陰 地三分湿

土砂交莖土 肥油糶又干糶おけ冬へー 分株春彼岸

○笹龍膽 花濃青又白形ら朝鳥の答乃くはして中開之白花で上

品より開花九月上旬より十月迄あり 方二分陰 地三分湿 土回莖 肥

干糶淡小便 分株移とも春芽出ーの時ー 水々々ー上るる時ハ

切ると又切捨つる菰の類してく色も水々ひにて後水黒お入かゞ

○秋神遊菊 色白く英大輪之 開花九月上旬花抱へ咲なり



○日の丸 菊 色本紅其輪之 開花九月上旬之

○金紋 同 葩内赤く外黄之 開花九月上旬之

○皆川 同 色白其輪あり 開花九月土旬之

○並白 同 大輪之太白吉野初霜水晶中輪あり 輪あり 開花九月上旬之

○猩々 中菊 色赤黒く形ら日の丸菊小同 開花九月土旬之

○奴 大菊 葩外淡赤く内濃赤之 開花九月上旬之

○小町 中菊 色淡紅之濃紅の隈あり 開花九月上旬之

○両面 同 葩外赤く内白 開花九月上旬之

○更紗 同 又小菊あり其の圍の葩白く中の葩群簇下赤 開花九月上旬之

○東津 大菊 葩内赤く外紅鬱金之 開花九月上旬之

○小金餅 中菊 色黄之 開花九月上旬之 花形ら心葩高く 凌牙

り 縁小く 低く 形ら餅小似たり

○淡櫻 大菊 色名ら如 開花九月上旬之

○逢朽葉 中菊 花千重色極黄り 赤と含多り 開花九月

上旬之 此花夏を残り咲たり 又秋作りたり

○烏頭 花中紺色又白り 至く上品 開花九月上旬之

方三分陰 地二分湿 土回莖 肥淡小便寒中三度 又花前又二度 撓ぐ

ぐ 抹寒中小台 一升水切口と焼べ



新編 草木譜 卷之四



寒櫻

濱菊



一行寺楓

縮緬楓

新編 草木譜 卷之四 九月廿七



○物狂椿 花二重色の一輪紅一輪紅白點班一輪紅白筋班一輪紅白絞班

此乃如く毎一輪小交雜あり 開花九月中旬甚美麗なり

上品とて同種小正月咲とのあり是中品と

○わびと巾着椿 花二重色純白の開花九月中旬なり 形花葉至く

此は葉と鑄穿たる如く甚奇趣は是心鑄持の最上なりされど剪花者

とまげ心ざりといひて蓋茶室小賞翫一用也○此は昔の名乃苦心

ゆげ按よ寂寥數寄よ佳花なるもの等と託す之をせんうさう

或曰わびすけの豊太閣の下され 御銘ありは其樹は小存せりとて

○山茶花 花二重色淡赤開花九月中旬より正月月中旬迄なり

○蘿蔔花 即大根花 色白赤紫と少含ありるものり開花九月

中旬あり此花の散落種は自然咲之 保花の葉と菜花小同

○女郎花 花黄色くと同種の開花九月中旬又一種白花なる

あり花九月中旬より少後より 育方いづれも同剪時ハ

早朝より 升水と根と燻ぐ

○峯の雪椿 花二重色清白 開花九月中旬より形初嵐の如大輪あり

この剪花者畧して峯白の如り是も近世に出る新物と

○紅葉 楓 數種あり時節九月中旬より○青海○定家○山

○縮緬○毛氈○絲青海○野村秋も紫色と○一行寺秋と



枝群照る故小専ら用やう之右種類の内も秋を照るものおきど  
土地小よりて濃淡なり凡山林あふりよく照之就中摂州箕面山  
ありと殊更照強し且一行寺の土地小構よりして十分小照之  
さげや葉大して賞傳し又檻もよく照あり

○濱菊 花二重色白く葉黄くして高麗菊に似たり 開花九月

中旬之方向地一分湿土をとり肥淡小便花前小両度度く

だし 移播ともは春彼岸より 莖長く葉は小花朵す抽

その下品之莖短く二三寸と上品と此種少し予が園中に二三株有り

○八つ手 花白色 開花九月下旬 方地土肥 播く 分株 播きお

春秋兩彼岸は花を挿花に賞美され葉は夏月趣りて用やうし  
升水と葉と紋り巻上りて水は今程鋸目とく水器小杆やべし

○鳳蘭 花白地小赤縦筋斑之 開花九月下旬之 香氣賞と

だし 育方蘭類皆同し

○万年青 九月實淡赤し 傳る色増く春ふ至迄実保つ

さきと霜雪又鳥を防ぐために法紙の袋と被せやぐ

育方 五月の部小既小より花實葉の用も用やべし

○寒櫻 花彼岸櫻の花よりも之より 開花九月下旬より

寒中まで花あり 育方諸樹と同し



剪花翁傳前篇卷之四

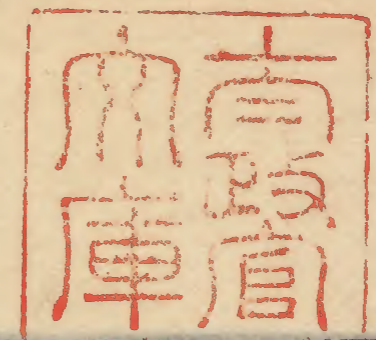
九月五日

○唐葦

朝鮮葦の如し九月又正月の頃緒花少き時挿花

して閑雅あり忠と勇止枝葉方小出さるは用ふ是葦と同種にして

水邊小生じよて育方いそり水さうと上りものあり



見たりやうせんせんせんの四畢  
剪花翁傳前篇卷之四畢



